



TITLE:

ラヂオ鏡で流星の観測

AUTHOR(S):

---

CITATION:

ラヂオ鏡で流星の観測. 天界 1942, 22(256): 339-339

ISSUE DATE:

1942-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168442>

RIGHT:

之の銘が刻まれて居り、之は泰邦が作つた圭表の臺石である事は測量御器之圖によつて明らかである。一番奥に、靴脱石として、現在使用されて居る礎石は、何に用ひられたか、知る由もないが、壬癸録（春海の高弟、谷泰山の著はすもの）——に

貞享改曆時……泰福卿立八尺鐵表於梅小路礎用内侍所舊石

とある内侍所舊石は、一體どうなつたであらうか？ 私は、之等、由緒ある礎石が、邸内の庭石として、毎日、足下にふまれるのを残念に思ふ次第である。科學博物館が出来た暁には、そこに保存されるべきものであらうが、今直ぐにも、之を何とか出来ないものだらうか？

貞享寶曆の改曆に際して、梅小路天文臺はその任を全うして、觀測に従事したのであるが、それ以後に於ては、江戸の天文臺と、大阪の間重富一派に天文觀測を譲つたかのやうであつた。而して、明治元年二月朔日、土御門晴雄の願出により、再び古の如く、同家に於て編曆事務を取扱ふ事になつて、梅小路天文臺は再び活躍する時が來たのであるが、惜しい哉、僅か數年で消滅せんとは。明治三年、天文曆道局を大學の所轄とするに及んで、土御門和丸以下30人を、天文曆道御用掛とし、同年八月、本局を東京に移すに至つて、京都には星學局出張所を置いたが、同年十月27日に廢されて、土御門和丸は大學御用掛を免ぜられることになり、此處に數百年存続した由緒ある梅小路天文臺は消滅したわけである。なほ、頒曆事務が土御門家に復活した維新當時には、曆版刻及び製本、頒曆等の事を司る事務所は、現在京都商工會議所の位置にあつたといふ事である。（終）

### ラヂオ鏡で流星の觀測

流星が地上何百キロといふ上空を通るときには、そのあとにラヂオ鏡を残す。即ち、その通路では空氣の原子が破壊されて、數分間、そのまゝ残つてゐるが、此れに電波を送ると、層の電離層に反射して戻つて來るから、その時間を測定すると、層の存在を検知することができる。これは、米國ハーヴァード大學クラフト研究室のJ・A・ピアース博士が最近に報告したことであるが、この方法を用ひれば、曇天でも晝間でも、流星の數を計算することができるわけである。

天文學では、地球の大氣圈に入つてくる流星の數を計算することは重要な問題であるが、曇天や晝間は、それができないために、完全に記録することができなかつたのである。今後はこの方法によつて、一層精確な流星數が決定されると思はれる。